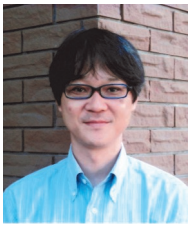
女性未来育成センター かわら版

第2号

平成26年1月21日発行
発行：愛媛大学ダイバーシティ推進本部女性未来育成センター
http://hime.adm.ehime-u.ac.jp
TEL/FAX 089-927-8602　E-mail hime@stu.ehime-u.ac.jp

―学生ら若い世代の意識改革から―

【意識改革WGリーダー　井上彰（法文学部人文学科）】



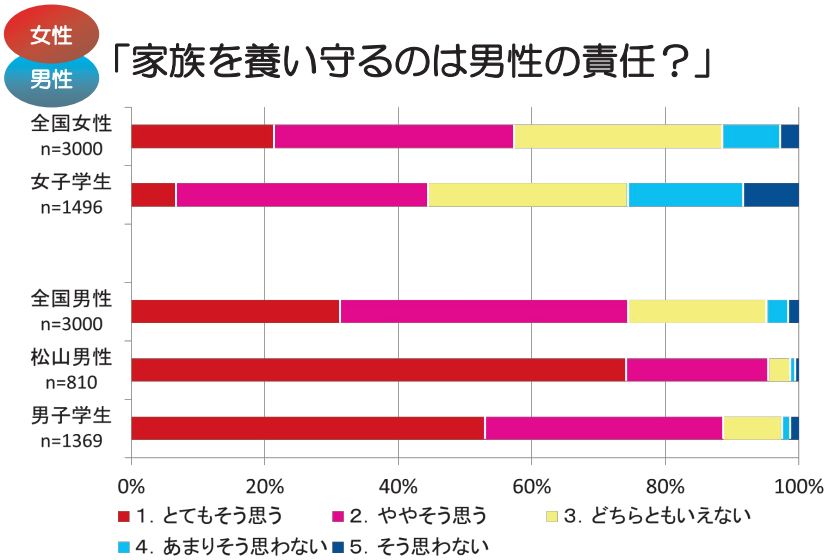
意識改革WGでは，学生の意識改革に重点を置いた取り組みを行っています。3，4回生に対しては言うまでもなく，入学したばかりの1回生にも，男女共同参画への意識づけを行っていくことが必要です。そこで教育学部では，平成24年度より，1回生対象の「新入生セミナー」の中で，男女共同参画に関する講話の時間が設けられました。来年度は，特に女子学生の比率が高い法文学部人文学科の「新入生セミナー」でも，同様に講話の時間が設けられる予定です。こうした地道な取り組みによって，今回の「男女の役割」意識調査の結果や男女の学生からのコメントに，2，3年後には「変化」が生じていることを期待しています。

特集　学生を対象とした「男女の役割」意識調査から見えるもの

女性未来育成センターは12月7日（土）の「えひめ男女共同参画フェスティバル2013」にて「男たちの本音トーク　男だってワークライフバランス」というイベントを実施しました。その中で，平成25年10月に学生を対象として実施した「男女の役割」意識調査（松山市域の大学等の先生方の協力で実施・調査の詳細は女性未来育成センターHPに掲載）の結果に対して，△EGG（さんかくエッグ）の学生が自分たちの考えを述べるという場を設けました。会場に集まった多世代の方々からも多様なご意見をいただき，よい交流の機会となりました。今号ではその様子をお伝えします。

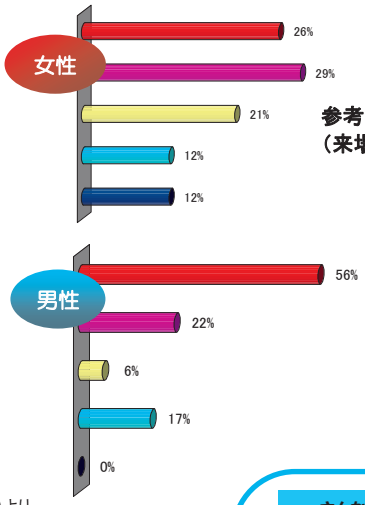
学生の意識調査にご協力くださった皆様，イベントにご来場くださった皆様，本当にありがとうございました。

「家族を養い守るのは男性の責任？」

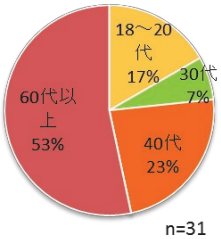


全国：「男性にとっての男女共同参画」に関する意識調査報告書（平成24年4月　内閣府男女共同参画局）より
松山：「男性の市民意識調査報告書」（平成25年3月　財団法人松山市男女共同参画推進財団）より
学生：松山市近郊の学生を対象とした「男女の役割」意識調査（平成25年10月実施　女性未来育成センター）より

えひめ男女共同参画フェスティバル参加者の結果



参考資料「イベント参加者の年代」（来場者アンケートより）



n=31

男子学生は，「とてもそう思う」「ややそう思う」人が88.7%。松山市の全世代の男性に対する調査では95.6%ともっと高い数値が出ています。ところが全国の全世代の男性に対する調査では74.5%です。一見，全国に比べて松山は若い世代も含めてずいぶん保守的です。この結果を見て，4回生の男子学生は「家族への責任感があると思う」とコメントしてくれました。会場の男性からは「男性の責任と思わない人が少ないのはなぜ？親から受けた価値観そのままなのかな」との感想がありました。女子学生の回答は「そう思わない」「あまりそう思わない」人が25.8%もいました。「とてもそう思う」「ややそう思う」人は44.5%と男子学生の半分。1回生と3回生の女子学生はともに「男性だけに任せるのではなく，家族に対する責任は女性にもあって、男女ともに責任があると思っています。」とコメントしてくれました。会場からは「年齢層が高い女性は，やはり男性の責任と思うのでは？会場の女性と女子学生の差は世代による差だと思う」との女性の声や，「10年前の意識や世界の意識との比較も知りたい」との男性の声がありました。

さんかくエッグ △EGGって何？ Ehime Gakusei Gab

性別にかかわらず，誰もが能力を十分に発揮でき，多様な生き方・働き方を選択できる社会を目指して活動する愛媛の学生グループです。

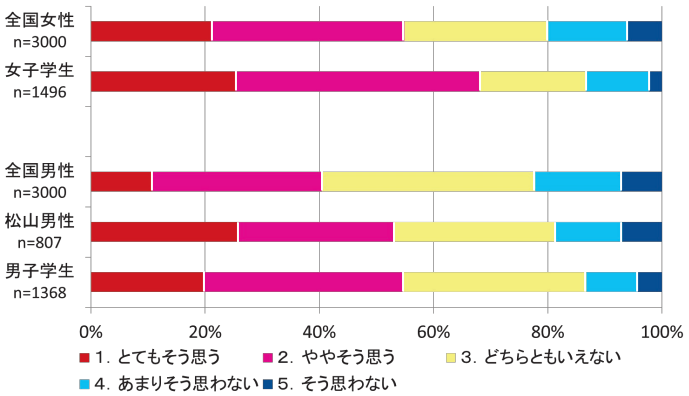
Gab（おしゃべり）しながら女性未来育成センターと一緒に様々なイベントを企画運営します。

Gaby（ギャビー）

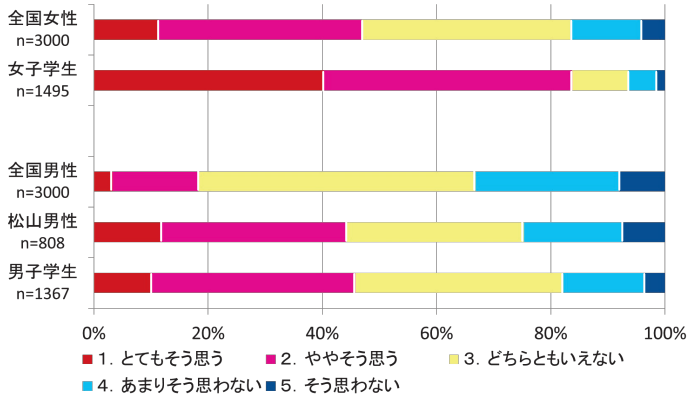
数字でダイバーシティ☆②
男女の役割への意識

「男女の役割」意識調査の続きです。「育児は母親」という意識は高いのですが，「お互いの人格や能力を尊重し，必要に応じてお互いが家事や育児を交代し合える関係がよい」と考える人は男女ともに90%以上です。会場からは「理想はそうでも現実には様々な事情でそうできない人たちが多い。」との声があがりました。

女性　子どもに手がかかるうちは働きたくない
男性　子どもに手がかかるうちは妻に働いて欲しくない



女性　自分もできるだけ稼ぎたい
男性　妻にもできるだけ家計を担ってほしい



子どもができたらしばらくは家にいて欲しい（あげたい）と考える人が男女とも多いのですが，3回生の女子学生は「働き方によって子どもと一緒にいる時間を持てるなら，働きつづけたい。自分の自由になるお金も必要だし。」とのこと。調査結果からも男子学生は妻にもできるだけ家計を担って欲しいし，女子学生も自分もできるだけ稼ぎたい人がとても多いようです。男性はどちらともいえないという人も多いのですが，4回生の男子学生によると「妻の働く意志を尊重したいと思います。」とのこと。男女の学生が口をそろえて言ったのが「今の社会の現実を考えると，共働きでないとやっていけないと思う。」という現実的な言葉。会場の男性からも「夫の稼ぎだけで暮らすのが理想だが，現実的に経済的に家族を守る方法が共働き」との本音？も聞かれました。会場の女性からは「自分も仕事をしたいと思って続ける女性も多いし，私もそうです。」との発言があり，1回生の女子学生は「私も自分のしたいこと，夢に向かって働き続けるつもりです。」と返していました。

意識改革WGの先生方からもコメントをいただきました！

◆男女の役割分担について保守的な考えをもちながらも，結婚後も働きつづけ協力して子育てをしていくというのが平均的な意識のようです。こどもは親の後姿をみて育ち，親の価値観を引き継ぎます。意識は一朝一夕で変わるものではありませんが，いまの若い世代は，ともに働き，ともに子育てをせざるをえない経済社会環境になっています。だからこそ，無理して頑張るのではなく，「フツーの生活」を楽しみながら，多様な生き方，働き方を認めていくシステムが必要なのだと思います。
by 兼平裕子（法文学部総合政策学科）

◆全国と比べより保守的な家族観を持っているように一見みえますが，男女ともに女性が働くことに賛成で必要に応じて役割分担をすることにも積極的なことが伺えます。なので，職場や社会で育児やワークライフバランスへの支援が充実していけば，男女の差なく利用する人も増え，女性の離職率低減にも大きく貢献していくのでは。仕事を続けていくことは自分の人生を充実させ社会貢献していくことでもあるので，各人が自分の満足いく生き方を選べる多様性のある社会にしていきたいですね。
by 濱村奈津子（沿岸環境科学研究センター）

発表した△EGGの学生たちは？

●男性の家庭への責任感が想像以上に高くて驚きました。男性は家族を養わければならないという強い意志を持っていることを感じました。
また，女性は自分でお金を稼ぎたいと思っている人が多いことが印象的でした。以前のような『男は仕事，女は家庭』という観念が薄れているように考えます。これからの時代は，観念にとらわれること無く，互いに不完全な部分を助け合って生活していくことが必要であると感じました。（教育学部4回生　中川亮介）

●自分が考えていた調査結果と違っていて少し驚きました。高い年齢層であった会場の女性達の回答では，男性が働き女性が家事をするという考えの人が多いと想定していたのですが，実際は自分が働くべきだと考えている女性が圧倒的に多かったことがとても意外でした。たしかに近年は女性にとって働きやすい社会になってきていると思います。今回は松山でのデータが主でしたが，更に多くのデータを見ていろいろな立場での考え方を知っていきたいです。（SSC1回生　藤井麻緒）

●「男性は仕事，女性は家事・育児」という昔の考えはほぼ無くなっているように感じました。男女ともに家事・育児を分担し，お互いに協力して暮らしたいと考える一方で，育児休業が希望通りには取得できていない現状があることも知りました。この声が企業に届き，男性も女性も誰もが充実し満足のいく日々を送れるよう制度などが改善されていくことを期待したいと思います。（SSC1回生　松本絵理）

働き続けたい女子に！

コムズフェスティバル市民企画分科会
「先輩に聞く！女子の生き方」～働き続けるには工夫が必要？
日時：1月25日(土)　10:00～12:00
場所：松山市男女共同参画推進センター(コムズ)　4F視聴覚室
仕事・育児に奮闘中の女性4人と学生グループ△EGG(さんかくエッグ)による座談会。働きながらの育児ってやっぱり大変？など，これから社会に出る女子学生が気になることを先輩にぶつけます！

編集後記 枝葉末説

「高学歴の20代女子も専業主婦願望が強い」という記事を見ました。家庭と仕事の両立に苦労している先輩女性を見て「働くことは苦行」と考え，専業主婦願望が強くなっているのだとか。今の若者は自分たちの責任で生活することを大変だと感じているのでしょうか。普通のことを大変だと若者に思わせてしまう社会もどうかと思いますが，やってみれば案外なんとかなるかもと（たぶんまだ若者の部類に入る結婚生活初心者の）私は思います。１月25日コムズで「女性が働き続けること」一緒に考えてみませんか。（むー）

「ひめーる」配信中
女性未来育成センターの取り組みなど様々な情報をメールマガジンでお届けしています。
配信希望の方はこちらまでご連絡ください。
⇒hime@stu.ehime-u.ac.jp